かいぎん

エコマガ

ECONOMIC DATA & MANAGEMENT MAGAZINE

vol.223 OCTOBER 2023

10

The Voice
観光通し「地域」次世代に
株式会社 Endemic Garden H

KRI アウトルック
価格転嫁企業、再値上げも

地産地商
豆乳・おからで健康スイーツ
SWEETS SHOP SOYSOY

津口
人材アセスのススメ



波の上ビーチ

OKINAWA KAIHO 海邦銀行



朝比奈寛幸税理士事務所 代表税理士、
シナリオ・プランナー、農業経営アドバイザー
朝比奈 寛幸



未来「創造」への挑戦

感染症によるパンデミックの影響、ロシアによるウクライナへの侵攻、われわれが数年前には予測し得なかった状況が次々と生じています。もはや「未来を予測する」などということはとても難しいことではないでしょうか。そこで、この“未来”へのアプローチを少し変えてみませんか。

予測をやめてみる?!

2020年1月15日に国立感染症研究所において日本で初の新型コロナウイルス陽性の結果が得られました。この時に「このウイルスへの感染者が、1年後に日本で累計31万人以上、世界で１億人に迫る状況になる」と誰が予測し、信じることができたでしょうか。しかしながら、これらは現実となり、そして今後も「起こり得る」ことであり、望まなくても、予測できなくても、私たちはこれらに対応しなければならないのです。

ではどうすれば良いのでしょうか。

まずはモノの見方を根本から変えてみること、それは「完璧な予測（計画）は不可能」という前提を受け入れることから始めなければならないでしょう。次に未来がどうなるかを当てようとすることから、「未来がどうなり得るかを“理解する”こと」に力を注ぐことではないでしょうか。

未来を創造する思考ーバックキャストー

「未来を考えてみましょう」というと、人は通常「起こってほしい」または「起こる（べき）だろう」といった未来を想像することが多いと感じます。これには「未来を、過去から現在の延長線上に考えようとする」私たちの思考が影響しているでしょう。明日は今日が、さらに来月は今月が少し変わるだけ…。過去から現在の“事実”に基づいて予測が行われれば「より確実だ」と思ってしまいませんか。しかし、残念ながら、過去から現在までを創ってきた“前提”そのものの変化が速く、そして、ときにそれが大きくもなり得るのが私たちを取り巻く今の環境です。つまり、予測は的外れになりやすいのです。

このような「フォーキャスト（forecast）」の思考方法に対し「バックキャスト（backcast）」という思考方法があります。簡単に述べると、「未来がどうなり得るか」を何よりも先に考える方法です。予測や願望といった過去・現在からの延長ではなく、客観的に「未来の可能性（＝起きるかどうか分からないこと）」を考えてみるのです。フォーキャスト思考では、より完璧な“予測”を目指すため、「起きるかどうか分からないこと」は通常見落とされます。一方で、バックキャスト思考では、これまでは見落としていた「起きるかどうかは分からない」にアンテナが向きやすくなります。そして、さらにそれが組織や産業に大きな影響を与えることであれば放っておけませんよね。

バックキャスティング

起こりうる、複数の未来を「想定」して、対策を練る

- 起点が未来
- 客観的未来
- 「世の中はどうなっている？」から始まる



したがって、まず個人や組織の現在までの価値観やときに成功体験といったものを手放し、より客観的な未来の可能性を考える必要があるのです。そして、そこから現在に戻り、“いま”の自分たちを振り返り、これからどうあるべきかを考え未来を創造してみてはいかがでしょうか。

未来を組織で考える方法ってあるの?!

この見出しへの答えは「イエス」です。

実はこれまでの内容、つまり、未来における不確実かつ影響大な可能性を考えることを組織で実行するための手法があります。それは「シナリオ・プランニング」という手法です。

詳しくは別の機会となりますが、ビジネスや行政においては1970年代から現在に至るまで世界中において実施されており、結果として自社の事業計画へも繋げる可能性を持つ手法です。

リーダーシップの本質とは「未来に挑み続けることだ」という言葉があります。チームで未来の可能性を理解し、変化に柔軟な組織を創りながら“自社の未来”に挑戦してみてはいかがでしょうか。